島地内には1970年代まで、イノデ、ヤマグワ、ムラサキケマン、ヘビイチゴ、ナワシロイチゴ、エゴノキ、ニワトコ、ムラサキケマン、ノアザミ、アキノキリンソウ、シャガが生育していたのを筆者は確認しているが、これらの種はいずれも、その生育地がアスファルトやコンクリートで覆われたため消滅した。一方、1990年代より、それまで分布が認められなかったシュロ、ヤツデ、オモト、ナガイモが確認された。これは、栽培からの逸出によると考えられる。

引用文献

岩槻邦男(編). 1992. 日本の野生植物シダ. 平凡社, 東京.

長井幸雄. 1999. 富山県植物雑記（3）. 富山の生物（38）：65-79.

長井幸雄. 2006. 富山県植物雑記（10）小矢部園芸高等学校の野生植物. 富山県高等学校教育研究会生物部会報（29）：1-5.

長田武正. 1990. 日本イネ科植物図譜. 平凡社, 東京.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫（編）. 1981. 日本の野生植物草本Ⅲ合弁花類. 平凡社, 東京.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫（編）. 1982a. 日本の野生植物Ⅰ単子葉類. 平凡社, 東京.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫（編）. 1982b. 日本の野生植物Ⅱ離弁花類. 平凡社, 東京.

佐竹義輔・原寛・亘理俊次・冨成忠夫（編）1989a. 日本の野生植物木本Ⅰ. 平凡社, 東京.

佐竹義輔・原寛・亘理俊次・冨成忠夫（編）. 1989b. 日本の野生植物木本Ⅱ. 平凡社, 東京.

清水建美(編). 2003. 日本の帰化植物. 平凡社, 東京.

Sφrensen , T. 1948. A method of establishing groups of equal amplitude in plant sociology based on similarity of species content. Biol. Skr. 5 (4)：1-34.

北陸の蟹伝説－Ⅰ．能美市の蟹淵

本尾　洋

日本海甲殻類研究会　〒924-0026 石川県白山市平木町40

Legendary tales of crabs in Hokuriku district, Japan-1. "Gambuchi" (crab pond) at Nomi City

Hiroshi Motoh

著者はエビ・カニ類に関する分類、生態や漁業・資源に関心を持ち続けており、近年はその延長として文学、民芸、芸術などの人文科学分野にも興味の対象を拡げている。生物学的な調査研究を掘り下げていくと、不思議にも従来無関係と思われて関心を払わなかった文学的な内容と生物そのものとの因果関係に惹かれてくる。

現在、北陸のエビ・カニ類の生物そのものと平行してそれらに纏わる文学的資料の収集を行っており、その皮切りとしてここでは石川県能美市に伝わる蟹淵（がんぶち）伝説を、その自然環境を交えて紹介する。

調査方法

白山市中央図書館と能美市立博物館で各地の蟹伝説や昔話に関する文献を調べているなかで、石川県能美市に蟹淵伝説があることを知った。そして友人角野行栄氏のアドバイスを得て、実際に伝説の舞台となっている現地を訪れ、蟹淵の自然や地形を観察し、後日既往の関連文献を渉猟して、同伝説にかかる考察を行った。

結果と考察

蟹淵とそこに至る道筋およびその付近を図１に示した。蟹淵を訪れたのは平成17（2005）年９月26日の晴れた日で、午前９時に四輪駆動車で和気小学校を出発した。20分ほどしてＹ字道路にさしかかると「蟹淵」の案内標識と石碑があり（図１①，図２Ａ，Ｂ）、それには蟹淵まで２kmと記されていた。ゆっくり進むとゆるやかな登り道は細くかつ険しくなり、しばらく行くと今度は右折表示があった（図１②，図２Ｃ，Ｄ）。そこに蟹淵へ800ｍとの標識が立っていた。案内に従って右に折れる。ここからは車が１台通れるくらいの狭くて砕石を敷いた悪路で、かつ勾配がさらに険しくなった。やがて行き止まりとなりそこで下車した（図１③）。そこに能美市教育委員会「名勝・天然記

図1. 蟹淵の位置．①～④は図２，３の説明用．

念物蟹淵（がんぶち）」の立て札があり（図３Ａ）、それには蟹淵の自然についての説明が下記のように書かれていた。

「この蟹淵は、標高268mの高所にあり、山に囲まれた周囲約200mの青緑色の水をたたえた化け物伝説の残る神秘の湖です。動植物の宝庫として知られ、100m以上の高知に棲むというルリイトトンボや天然記念物のモリアオガエルなどの生息地として専門家の注目を集めています。とくに、トンボの珍種が多く、県内では小松とこの蟹淵にしか生息の確認ができないというネキトンボなど10種類のトンボが見つかっています。この蟹淵では、春の雪解けとともに新緑が始まり、６月の雨期のモリアオガエルの産卵、秋にはコバルトブルーのトンボの乱舞、冬の深山一面に広がる銀世界と、蟹淵は四季折々の姿を見せてくれる能美市の中でも自然の宝庫といえます」（註：原文では要所にルビあり）。なお、同看板の説明は蟹伝説の由来などについては一切触れていない。

この看板の右手を通り抜けて、登り坂の狭くて深いブッシュ道が120mほど続き、ゆっくり歩いて十数分で目指す蟹淵に着いた（図１④）。そこに再び、同淵が天然記念物であることを示す石碑があった（図３Ｂ）。

初めて見る蟹淵は緑っぽい青い水をたたえて静寂のなかにあった(図４Ａ，Ｂ)。オニヤンマ、ショウジョウトンボやルリイトトンボが飛び交っている。道案内の安田二三男氏によるとトンボは20種ほど生息しており、蟹淵はまさにトンボの楽園でもある。

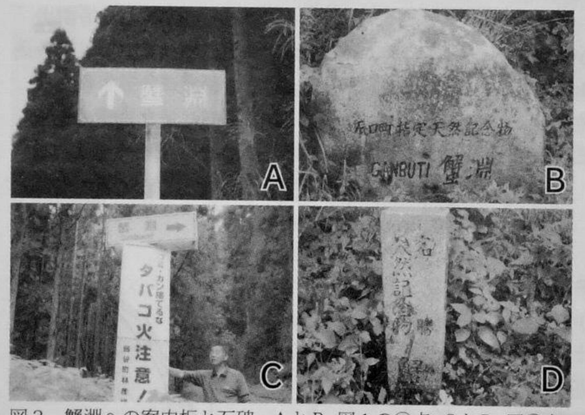

図２．蟹淵への案内板と石碑．ＡとＢ，図１の①点；ＣとＤ，同②点．

図３．Ａ，蟹淵の説明板（右手が蟹淵へ通ずる小径）（図１の③点）；Ｂ，蟹淵の出水口近くにある石碑「名勝天然記念物　蟹淵」（図１の④点）．

淵の周囲を時計回りにゆっくり歩いている途中、トンボが水面に葉を拡げるヒツジグサの茎当たりに産卵しているのが複数カ所で見られた（図４Ｃ）。淵のほぼ全周辺にヒツジグサ、奥部にはヒルムシロやカンガレイが生育していた。１周した結果、蟹淵は不規則な五角形をしていることが判った（図５）。そして淵の側方と上流の奥方から計４つのせせらぎが流入していた（図５の４流入矢印）。そのうちの最奥部に位置する１カ所にサワガニが住むというので、そこで小岩や石をどけて蟹を探してみた（図４Ｄ）。しかし日中のせいもあってか蟹は見つからなかった。最深部が6.7m、面積は季節により増減があるものの大凡2,300㎡の蟹淵は昭和56（1981）年７月22日に辰口町（現能美市）の名勝天然記念物に指定された動植物の宝庫であることが実感された。同町の資料によると、指定の範囲は湖面中央から直径170mの円内、所有者は20名、管理責任者は鍋谷区長である。そして蟹淵に生息する動植物の研究と環境保全に力点を置いていると記してある。

途中２箇所での短い休憩を挟んでゆっくり散策を続け、およそ１時間ほどで元来た場所に戻った。そしてそこに淵の水位を調節する１ヵ所の出口があるのに気付いた（図５の流出矢印付近）。言い伝えから想像を逞しくすると、伝説中の「百姓が鍬で水口を開いた」とされる位置はまさしくこの出口部分であろうと思われた。

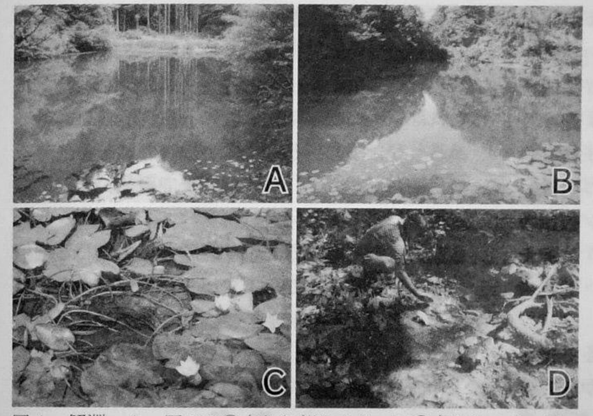

図４．蟹淵．Ａ，図５の①点から望む：Ｂ，同②点から；Ｃ，同②点一帯に繁茂するヒツジグサと産卵中のトンボ；Ｄ，同②点に注ぐせせらぎでサワガニを探す．

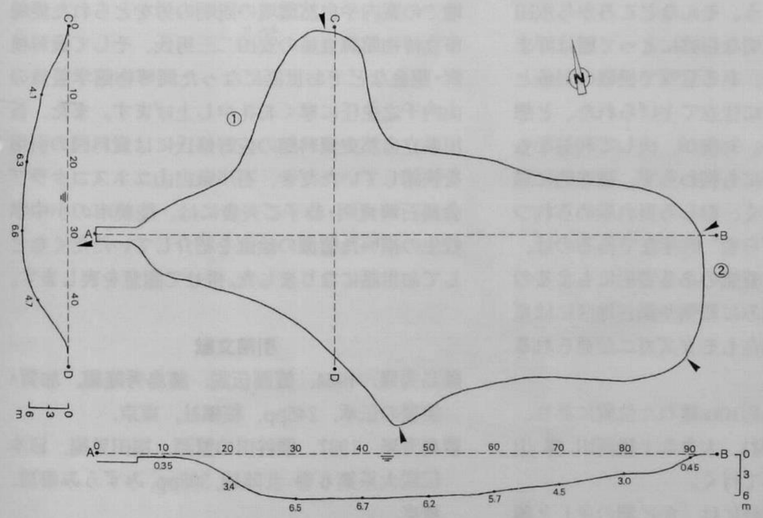

図５．蟹淵の形状（山本・佐野，1998より）．①，②は図４の説明用．矢印は流入する４せせらぎと１出水口付近。

帰路、険しい山道をゆっくり四駆車で下りる際、左手前方の杉林の一角でこちらをじっと窺う１頭のカモシカに至近距離で出会った。自然が良く保たれていることを実感する。

さて、伝説の舞台の中心部分の蟹との出会いの場所は前述したように、まさしく淵の出水口である。入手した資料のなかで最も古い石川県能美郡役所（1923）の記述によれば、蟹淵伝説とは以下のものである(原文は縦書き)。

「天明の頃大旱あり、和気の民雨を神仏に祈れども験なし、乃ち大挙して水源地蟹淵に到りて神撰を供し、水口に孔を穿ちしに、忽ち巨蟹の現出するものあり、一人誤りて鍬を以て其の一足を絶つ、是に於いて蟹は其姿を土中に隠すと同時に、陰雲起こり雷鳴轟き、大雨車軸を流すが如くに至る、後和気の土民山中温泉に浴するに、一丈夫の左肢を傷くる者を見たり、已にして相携へて家に帰りしが、途にして其の姿を失へり、此時法川谷より帰れる炭焼夫に遭ひて、何れの者なりやと問ひしに、彼れは千年以来此の渓谷に住するものなりとて去れりといへり、村民乃ち嚢日の巨蟹が負傷を医せんが為に、温泉に浴せしなりとし、干魃至る毎に彼の水口に祈り、その所を称して蟹淵といへり、」

（原文のまま．漢字は一部現代字体に変換．江戸時代の天明の頃は1781～1789年）。

上記以外の文献即ち、国府村史編纂委員会（1956）、清酒時男（1975）、永田義直（1979）、宮本茂（1983）、藤島秀

隆（1984，1987）、大澤俊夫（1995）にもこの蟹淵伝説が紹介されている。それらの中で、上記のように、化け蟹が土の中から出現したとする話と、水中から現れて鍬で傷付けられ再び水中へ逃げる話との違いがあるが、いずれも原典からの引用のせいでもあろうか、当然のことながら内容は大同小異である。

さて、ここに登場する蟹は言ってみれば悪役である。なぜ蟹が干ばつの雨乞いと関係するのだろうか。

水中・水辺動物であり、民家付近に住む蟹は必然的に水とそこに住む人々と縁が深いはずである。能美市の位置する石川県の河川域に住む蟹類としてはイワガニ科のモクズガニやサワガニ科のサワガニ、田畑や川の土手に穴居するベンケイガニ科のアカテガニ、ベンケイガニ、クロベンケイガニとカクベンケイガニがある（鈴木・本尾，1969；本尾，1974）。

上記の中で、土中から出てきたとされる蟹はその生態からベンケイガニ科であり、水中からの蟹はモクズガニとなろう（サワガニは淀んだ池・淵にはない）。とりわけ土手や畦に巣穴をつくるアカテガニ類は百姓からみれば水田の漏水をひきおこす憎い存在でもあろう。そんなところから水田耕作上、水がとても大切な百姓にとって蟹は好ましからざる存在であり、ある意味で畏敬の対象ともなって伝説の主人公に仕立て上げられた、と想像することは難くない。対象が、決して利益をもたらす生き物ではないにも拘わらず、徹底的に忌み嫌われるわけでもなく、むしろ畏れ崇められつつ共存可能な“いたずら者”的存在であるのは、蟹そのものの小さくて愛嬌のある姿形にもよるのではなかろうか。ちなみに和気や鍋谷地区には夏から晩秋にかけて、現在もモクズガニが見られる（安田二三男，私信）。

なお、蟹淵は海から約10km離れた位置にあり、その水は鍋谷川に注がれ、大きな１級河川梯川（かけはし）を経由して日本海へ出て行く。

ところで、島根県隠岐には「かに淵の主」と題して，淵の主の美しい娘がそこに住む大蟹に妨げられていて、木樵（きこり）に頼んで斧で蟹のはさみを切り落としてもらう話がある（横地満治・浅田芳朗，1936；小澤俊夫，1995）。これは昔話によくある失踪した娘と蟹淵の話が“合体”した内容のようで、ここでも蟹は手に負えない悪者としてではなく、そこでの共存可能な畏れの対象となっている。全国をくまなく捜すと類似の伝説がまだ見つかる可能性があるように思われる。

後日談であるが、平成６（1994）年８月下旬に、日照りが続いたことから和気の人々が故事に習って雨乞いの儀式を行ったところ、なんとその三日ほど後に降雨があったという（山内千之，私信）。これは現代の科学では偶然の一致と解されわけであろうが、不思議といえば不思議ではある。その後、現在（2007年）にいたるまで雨乞いなどの儀式は行われていない。

今後も石川県はもとより北陸各地に伝わる蟹伝説を収集し、そこから引き出される昔の人々の蟹への関わり・考え方を考察していきたいと思っている。

謝　辞

蟹淵の存在と関連資料を提供し、かつ拙稿に目を通してくださった能美市佐野の角野行栄氏、現地での案内や自然環境の説明の労をとられた能美市立博物館調査員の安田（あんた）二三男氏、そして資料検索・照会などでお世話になった同博物館学芸員の山内千之主任に厚くお礼申し上げます。また、石川県立自然史資料館の佐野修氏には資料図の引用を快諾していただき、石川県白山ユネスコクラブ会長石崎貞明・恭子ご夫妻には、能美市の小中学校生の描いた蟹淵の絵画を紹介していただくなどしてお世話になりました。併せて謝意を表します。

引用文献

藤島秀隆．1984．蟹淵伝説．藤島秀隆編，加賀・能登の伝承，245pp，桜楓社，東京．

藤島秀隆．1987．鍋谷川の蟹淵．福田晃編，日本伝説大系第６巻 北陸編，398pp，みずうみ書房，東京．

石川県能美郡役所．1923．蟹淵．石川県能美郡誌，1590pp，中川大正印刷舎，金沢市．

国府村史編纂委員会編．1956．雨乞伝説蟹淵．国府村史，810pp，国府村役場．

宮本茂．1983．蟹淵のぬし．辰口町史第１巻 自然民俗・言語編，810pp，辰口町役場，辰口町．

本尾洋．1974．石川県近海産エビ・カニ類の地方名．石川県増殖試験場研究報告，(3)：9-19．

永田義直．1979．かにの湯治．日本のこわい話．414pp，金園社，東京．

大澤俊夫．1995．かに淵の主．大澤俊夫編著，日本の昔話２，357pp，福音館書店，東京．122-125．

清酒時男．1975．蟹淵の化け蟹．清酒時男編，加賀・能登の民話:日本の民話21，307pp，国府村役場．

鈴木克美・本尾洋．1969．石川県沿岸のカニ．採集と飼育，31（7）：192-198．

山本邦彦・佐野修．1998．蟹淵調査報告書．ワープロ印刷，６pp．

横地満治・浅田芳朗編．1936．蟹淵の主．隠岐島の昔話と方言，郷土文化社報告第貳輯，85pp，郷土文化社，兵庫県．